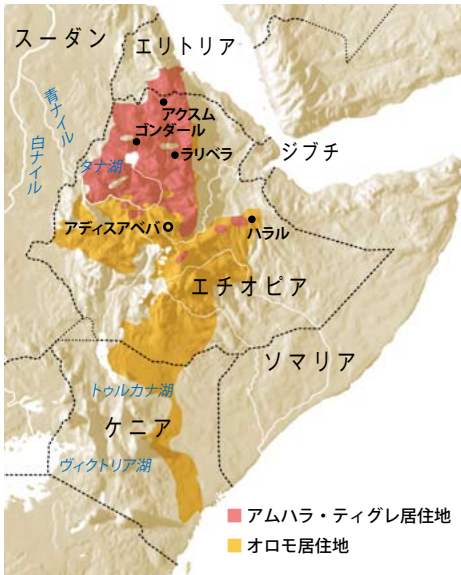


文字社会と無文字社会の狭間にて

石川博樹 いしかわ ひろき/AA研

文字社会と無文字社会の狭間に位置した
エチオピアのキリスト教王国。
その歴史を研究することは現代にも通じる
深遠な問題を投げかけてくる。



ソロモン朝エチオピア王国の都であったゴンダール。



アフリカ大陸の中でサハラ砂漠以南に位置する地域をサブサハラ・アフリカと呼ぶ。この地域には文字記録、特にヨーロッパ人の到来以前の記録が少なく、歴史研究が困難であることはよく知られている。その中で私が研究対象としている北部エチオピアのソロモン朝エチオピア王国は、住人が書き残した記録などから歴史を探ることができるという点で稀有な存在である。しかし王国内で読み書きができる人々は少数であり、このことは王国の歴史と文化に重大な影響を与えた。ここでは私が行っているソロモン朝エチオピア王国史研究の中で、リテラシー（読み書き能力）に関係する2つの研究の概要を紹介したい。

歴史叙述とリテラシー

ソロモン朝エチオピア王国は1270年に北部エ

雲上の修道院ダブラ・ビザン。



チオピアに成立した。王朝名は君主たちが古代イスラエルのソロモン王の末裔と称したことに由来する。この王国の主体となったのはアムハラ、ティグレという2つの民族であり、彼らはエチオピア教会の教えを信奉するキリスト教徒であった。王国は成立後エチオピア高原で版図を広げ、15世紀に最盛期を迎える。しかし16世紀に南方から攻め寄せたオロモと呼ばれる民族によって王国は甚大な被害を受け、その版図は半分程度に縮小した。しかしこの段階で王国は崩壊せず、ソロモン朝の君主がその座を奪われるのは1855年になってからであった。

以上のような歴史を知ることができるのは、ゲエズ語と呼ばれる文語で書かれた歴史叙述が残されているためである。しかしアムハラ語が主要な口語として用いられていたエチオピア王国では、貴族とエチオピア教会の聖職者の一部しかゲエズ語で書かれた文献の内容を理解できなかった。そして著述活動を担ったのが主にエチオピア教会の聖職者であったことは、執筆あるいは書写される文献が教会で使用されるキリスト教関連文献に偏るという結果をもたらし、さらには歴史叙述の内容にさえ影響を及ぼした。

ここで興味深いエピソードを紹介しよう。16世紀末オロモによって甚大な被害を受けていたエチオピア王国において、バフレイという名のエチオピア教会の聖職者がオロモに関する文献を著した。彼の執筆目的はオロモがキリスト教徒を圧倒している理由を明らかにすることであった。王国の版図を半分縮小させるほどの被害を与えたオロモについてこのような書物を著すことは、現代の我々からすれば至極当然のこのように思える。しかしバフレイの記述からは、彼がオロモに関する書物を著すことを躊躇していたことが伝わってくる。その理由を解き明かすべくバフレイの著作や同時代の君主の年代記の記述を分析すると、当時国内において書物を著すことの本来的な目的はキリスト教の神を賛美することであり、キリスト教徒に災いをもたらした「蛮族」の歴史を書くようなことは躊躇せざるをえなかったことがわかる⁽¹⁾。

イエズス会布教とリテラシー

読み書き能力が社会の一部の人々に限られていることは、時として歴史の展開にも影響を与えた。イエズス会は1557年から1634年という日本布



教会内の宗教画。



十字架を手にするエチオピア教会の聖職者。



教会内のゲエズ語文献。

教とほぼ同じ時期にエチオピア王国内で布教活動を展開し、この地の住民をローマ・カトリックに改宗させようとした。宣教師たちはススネヨス（在位1607～1632年）という君主を改宗に導くなどの成功をおさめたものの、最終的にはエチオピア王国から追放されてしまう。その経緯について彼らは報告書や著作の中で多くの紙数を費やして説明している。それらを分析すると、イエズス会のエチオピア王国内における成功と失敗がリテラシーと密接に結びついていたことが判明する。

まず従来ススネヨスの改宗については、オロモの脅威にさらされていたススネヨスがインドに進出していたポルトガルの軍事支援を得ることを期待して行ったものであると説明されてきた。しかしイエズス会士の報告を見ると、ススネヨスだけではなくエチオピア教会の聖職者の中にも、イエズス会士の布教に惹かれてローマ・カトリックに改宗した者が少なからず存在したことが窺える。イエズス会士たちは当時ヨーロッパで好評を博していた教理解説書などを利用した布教方法をエチオピア王国内でも採用した。読み書きをする能力があったエチオピア王国内の知識人の一部は、イエズス会士の布教方法の優れた点を理解したがゆえにローマ・カトリックへの改宗を進んで選択したと考えられる。

ススネヨスはローマ・カトリックに改宗し、王国内の住人にも改宗することを命じた。しかしその治世末に反乱が頻発すると、彼はこれらの反乱を鎮めた後に親ローマ・カトリック政策を撤回し、その直後に他界する。代わって即位した彼の息子ファシラダス（在位1632～1667年）はすぐにイエズス会士たちを追放し、ここにエチオピア王国内におけるイエズス会布教は失敗に終わることになった。従来ススネヨスが宗教政策を変更した要因としては、民衆の反発が強かったことが挙げられてきた。しかし注目されるのは、ススネヨスがイエズス会士たちに書き送った書簡の中で「ローマ・カトリック信仰に非はないものの、人々はそれを理解しない。」と述べていること、そして彼の治世末の反乱を主導したのが、学識ではなく禁欲などによって民衆の尊敬を集めていた隠者と読み書きができない「普通の修道士」であったことである。これらの隠者や修道士たちをイエズス会のリテラシーを活用した布教方法で改宗させることが極めて困難であることを悟ったがゆえに、スス

ネヨスはローマ・カトリックの布教を放棄せざるをえなかったと考えられる⁽²⁾。

私の研究の第一の目的は、ソロモン朝エチオピア王国史の空白を埋め、サブサハラ・アフリカの歴史の一端を解明することである。しかし文字社会と無文字社会の狭間に位置したこの王国の歴史研究を進める上で遭遇するこれまで述べてきたような事例は、文字を用いて何かを書くという行為

とリテラシーの関係、あるいは何かを敬い信じるという行為とリテラシーの関係といった現代にも通じる深遠な問題を私に投げかけてくる。

- (1) 詳しくは、拙稿「ソロモン朝後期の北部エチオピアに於ける歴史叙述の特色」『オリエント』第49巻第2号、182-199頁、2007年）を参照のこと。
- (2) 詳しくは、拙稿「イエズス会北部エチオピア布教—識字能力の観点から—」(川村信三編『超領域交流史の試み—ザビエルに続くパイオニアたち—』上智大学出版会、182-204頁、2009年)を参照のこと。